

2020/10/04

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑱

『いのちのパン』 ヨハネ 6:34-58

5000 人に食事を与えるという奇跡の後、イエス様がカペナウムに移動すると、多くの人がついてきました。イエス様はその人たちに、「あなたがたはしるしを見たからついてきたのではなく、パンを食べられると思ってついてきています。なくなる食べ物のためではなく、永遠のいのちを求めなさい。それは、神が遣わした者を信じることです。」と言われました。すると彼らは、「信じるためにどんなしるしを見せてくれるのですか。モーセは荒野でマナを食べさせてくれました。」と答えたのです。そこでイエス様は彼らに「モーセが与えたのは天からのパンではありません。しかし、神は、いのちを与えるまことのパンを、天からお与えになります。」と語られました。

✠ 神の言葉は納得するものではない

「そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに來ます。そしてわたしのところに來る者を、わたしは決して捨てません。」(ヨハネ 6:34-37)

イエス様は、「私が、神の与えるパンである。私を信じる者は、飢えることも渴くこともない。」と語り、「あなたがたは私を見ながら信じようとしない。」と彼らの問題点を指摘なさいました。彼らの問題点とは、神の言葉を信じようとするのではなく、納得しようとしていたことです。

人間は、物事の情報を集めて考察する能力、すなわち理性を持っています。理性は原因を追究して高みを目指す素晴らしいものであると同時に、人が知ることのできる限界を超えようとする誘惑を持っています。たとえば、宇宙の終わりの先はどうなっているのか、始まりの前はどうだったのか、というように、考えてもわからないことを考えようとする誘惑です。人は経験に基づくものしか知ることができないのに、理性が暴走し、経験の外を知ろうとしてしまいます。こうして彼らは、神の言葉に対しても、理性で納得しようとしたのです。

「父が私にお与えになる者」とは、「神の呼びかけに応答した者」ということです。その人たちは、イエス・キリストを信じるようになります。そして、イエス様はご自分のもとに來た人を「決して捨てない」と言っておられます。よく、クリスチャンになってからの行いが悪いと、救いが取り消されて天国に行けなくなると思っている人がいますが、そんなことは

ありません。「救いは信仰による」と、イエス様ご自身が繰り返し教えておられるとおり、救われているかどうかは、行いではなく、イエス様を信じているかどうかで確認するものです。信じた人は永遠のいのちを持ったのですから、救いが取り消されることはありません。

✠ 神の御心とは

「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる（信じている）者がみな永遠のいのちを持つ（持っている）ことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」（ヨハネ 6:38-40）

神の御心とは、終わりの日に私たちをよみがえらせることです。イエス様は、このままだと滅んでしまう私たちのことを「死人」と言いました。それを生きるようにすることが、神の御心です。

終わりの日とは、「全世界の歴史が終わるとき」のことだけではありません。「あなたが死ぬとき」も終わりの日です。肉体の死を迎えるとき、永遠のいのちを持っている人はよみがえります。それは、すでに霊のからだを着せられているからです。

✠ なぜつぶやくのか

「ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンである」と言われたので、イエスについてつぶやいた。彼らは言った。「あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は『わたしは天から下って来た』と言うのか。」イエスは彼らに答えて言われた。「互いにつぶやくのはやめなさい。わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」

（ヨハネ 6:41-44）

ユダヤ人たちは、イエス様の言葉に納得できませんでした。このように、納得しようとすると、つまずきが起るのです。ですから、イエス様は繰り返して、つぶやかないで、信じる者になりなさいと教えておられます。なぜなら、私たちにとって神とは、理解したり納得したりする対象ではないからです。

神は永遠です。永遠とは、時間と空間に左右されないということです。つまり、永遠とは静止した状態です。

たとえば、りんごが落下する映像も、1枚1枚は静止したりんごの写真です。静止の連続によって、動いているように見えるわけですが、日常生活の中ではそれを静止ととらえることはできません。次の瞬間にはもうそこにはないからです。

私たちはこの地上において、常に時間と空間に支配された中で動いています。ですから、時間にも空間にも左右されずに変化しないものを認識することはできません。神は、昨日も今日もいつまでも変わらない方です。そのため、人は神を認識できないのです。

しかし、認識できなくても、神がおられることはおぼろげながらわかります。ならば、信じるしかありません。神は、私たちの理性の外におられるのです。

このように、信仰と理性の線引きがしっかりできていないと、納得することが信仰だと思ってしまう。しかし、そうではありません。信じるしかないからこそ、イエス様は、神の国の多くをたとえて話しました。

ユダヤ人たちの問題は、時間と空間という自分の物差しで神を理解し、納得しようとしたところにあったのです。

✠ 神によって教えられる

「預言者の書に、『そして、彼らはみな神によって教えられる』と書かれていますが、父から聞いて学んだ者はみな、わたしのところに來ます。だれも父を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。」

(ヨハネ 6:45-46)

神によって教えられた者、すなわち神に応答した者はイエス様のところに來る、とイエス様は言われました。「神によって教えられる」とは、どういうことでしょうか。

昔、ソクラテスは、私たちが何かを判断する時、その理由を突き詰めていくと、誰も答えられなくなることを発見しました。たとえば、誰かをいい人とか悪い人とか判断した理由を「どうして?」「それはどうして?」と、問い詰めていくと、最終的には誰も答えられなくなってしまいます。つまり、私たちの中には確かに判断の基準があるのですが、誰もその基準がわかっていないというのです。

このことについて、ソクラテスの弟子のプラトンは、それは神が私たちに教えているからだと考えました。これをイデアと言います。私たちは、一人一人に与えられた神のいのち(魂)を通して、神に教えられているから、物事を判断できるのです。

カントは、このことを次のように説明しています。

私たちは、ものを食べる時、何を食べるか自由に選択できることを自由だと考えます。しかしカントは、ものを食べるのはおなかがすいたからであって、もしおなかがすくという原因がなければ、食べるということをしなないのだから、それは自由ではなく、自然の法則、因果律だと言いました。

ところが、人は因果律だけで動いているわけではありません。自然法則に従うだけなら、

手段は問わないものですが、人は食べる時、「盗んではいけない」と考えるのです。これが動物とは違うところです。私たちの魂は、神から愛することを教えられているので、愛に違反することを避けようとするのです。

つまり、人は、因果律を飛び出すことができます。これが自由です。因果律にしばられず、神の呼びかけに応答し、他者を尊重し、愛することを選択することができるのです。

原因や理由を追及し、納得して生きようとするのは、時間と空間にしばられた奴隷です。私たちはこの世界で、ただ因果律を選択させられているに過ぎません。これを聖書は死の恐怖の奴隷と言います。神が私たちに教えているのは自由になることです。

神を愛するとは、神の言葉を信じることです。それは因果律を超えることです。ここに自由があるのです。因果律を超えて自由になる方法、それは、神が教えている方法をあなたが選び取ることです。

✂ 信仰とは飛躍すること

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。わたしはいのちのパンです。あなたがたの父祖たちは荒野でマナを食べたが、死にしました。しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きています。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。」すると、ユダヤ人たちは、「この人は、どのようにしてその肉を私たちに与えて食べさせることができるのか」と言って互いに議論し合った。イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。」(ヨハネ 6:47-55)

イエス様は、「つぶやかずに信じる者になりなさい」と語った後、「私の肉を食べ、私の血を飲む者は永遠のいのちを持っている」と、ますます人間の経験では理解できないようなことを語られました。

なぜイエス様は「つまずくな」と言いながら、わざわざつまずくようなことを語られたのでしょうか。

それは、イエス様は、なんとしても彼らを信じさせたかったからです。どうしても納得できないならば、最後は信じるかどうかの選択肢しか残りません。

現代の私たちにとっても、たとえば「三位一体」を理解するなどということはとても難しく、納得できないものです。それは、神は納得する対象ではなく信じる対象だからです。信じるためには、納得できないということに気づかなければなりません。だから、イエス様は

絶対に納得できないことを言っておられるのです。

つまり、イエス様はここで信仰の選択を迫っておられるのです。「信じる」とは、キルケゴールの言葉を使うと「飛躍」です。「信仰」とは、自分を乗り越えることであり、自分の中に収めるのは「納得」です。それが、「信仰」と「納得」の違いです。

私たちは時間と空間という制約の中で生きていて、その中でしか考えることができません。すべてのことには原因があって、原因によってすることが決められていて、自由がないのです。信仰とはそれを乗り越えることです。そこから脱出する方法は、因果律を飛び越えるしかないのです。イエス様は彼らに、乗り越えさせようとしておられるのです。

どうぞ「納得する」という姿勢を廃棄して、乗り越えましょう。

イエス様はあなたに、いつ自分を捨てることができるか、問うておられます。これが、昔からの表現では、「自我に死ぬ」とか「古い自分に死ぬ」とか「肉に死ぬ」ということです。いつあなたが納得することを放棄し、神を見上げて本当に信じることができるか、イエス様は私たちに迫っておられます。このいのちがけのメッセージを通して、信じる者と信じない者に分けられます。

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。」(ヨハネ 6:56-57)

ヨハネの福音書1章1節にある通り、「わたし」とは「御言葉」を指します。ですから、イエス様がここで言われていることは、わたしを信じようとする者は、神の言葉にとどまろうとするということです。

イエス・キリストを信じるならば、神の言葉に踏みとどまりましょう。わからなくても、「聖書にそう書いてあるから」と、神の言葉に希望を託すのです。世の中の因果律は、困難に対して否定的な思いになります。しかし、神から教えられている聖書には「神は解決する」と約束されています。その約束は因果律を無視しますから、世の中では奇跡と言われます。神は奇跡の神です。あなたを助ける神です。奇跡を信じましょう。

✠ 永遠に生きるとは

「これは天から下って来たパンです。あなたがたの父祖たちが食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」(ヨハネ 6:58)

「永遠に生きる」とは、「霊のからだ」を持つことです。

人間とは、からだと魂によって生じた意識(精神)のことです。からだはこの世界の情報を収集し、神のいのちである魂は神の情報を持ち込みます。こうして、二つの異なる情報が合流し、エネルギーがぶつかって、意識が生じます。意識とは、統合する運動なのです。

ですから、この地上での命が終わりからだが朽ちる時、意識は消えてしまいます。そして、魂は神に返却されるのです。しかし、霊のからだを着せられることによって、意識は止まることなく永遠に生きられるようになります。

霊のからだは静止しているものを見ることができ、神の情報を知ることができます。こうして、イエス・キリストを信じることができるようになるのです。この霊のからだのことを、永遠のいのちと言います。永遠に生きるためには霊のからだが必要です。神の呼びかけに応答するなら、霊のからだを着せられます。あなたは、すでにこのからだを持っているのです。このことを、イエス様は「このパンを食べるものは永遠に生きています」と言われたのです。

永遠のいのちや霊のからだは、納得するものではなく信じるものです。信仰とは、自分を乗り越えることです。「私が〇〇なのは、△△だから」と、因果律の中で自分を見る限り、希望は見えてきません。この希望を教えるために、イエス様はいのちがけでチャレンジしておられます。この希望に耳を傾けましょう。